



紙つづて

「きれいな花には悪いけどこの花を見るとあの暑かった夏を思い出すね」が亡くなった母の口癖でした。今年の夏は記録を

更新する酷暑ですが、六十八年前も厳しい暑さでした。当時兵庫県鳴尾村(現西宮市)の国民学校初等科一年生だった私は、もう防空壕に入らなくてよくなり焼け跡で遊ぶ日々でしたが、親たちは住むところと食料の確保に大変だったようです。校庭のはずれに紅い夾竹桃がたくさん咲いていました。

ぎりぎりまで焼け残ったわが家には数家族が同居していました。停電は毎日配給があれば長い列に並ぶ空腹を抱えた生活でしたが、焼け出されて壕やバラックに住み、出征したお父さんを待つ友達と比べれば、高齢の両親と暮らす私は恵まれていました。

夾竹桃

あれから半世紀以上、夢の夢だった冷凍冷蔵庫が当然のように家にあり、レストランには食べ残しがあふれる先進国の暮らしになりました。

「飢えないための科学技術立国」というスローガンは理系の大学に行くことを自立の条件と考えていた若いころの私には魅力的で、疑問を持ちませんでした。しかし、あの戦争を被害者としての視点だけから語ってはいけないように、科学技術の負の側面にも遅ればせながら目を向ける時期に来ていると、二〇一一年の福島原発事故以来、痛感しています。測候所の利活用という「科学技術者の一角」にいますが、自分の生き方への反省も含めて、少し書ければと思います。



(土器屋 由紀子＝富士山

測候所を活用する会理事)